

便秘と便秘薬の使用が死亡リスクや心臓血管病リスクと関連

便秘は日常診療において最も頻繁にみられる症状のひとつであり、腸内細菌叢の変化によりアテローム性動脈硬化症の発症が引き起こされると考えられている。しかしながら、心臓血管イベントの発症との関連についてはほとんど知られていない。本研究では、便秘および便秘薬の使用と心臓血管イベントの発症との関連について検討した。

2004年10月1日～2006年9月30日に、推算糸球体ろ過量が60mL/分/1.73m²以上の米国の退役軍人3,359,653例が対象となった。2013年まで追跡した結果、237,855例（7.1%）が便秘と同定された。人口統計や一般的な併存疾患、薬物治療、社会経済的地位について多変量調整後、便秘の患者は便秘でない患者に比べて、全死因死亡が12%高く（ハザード比1.12）、心臓血管病発症率が11%高く（同：1.11）、虚血性脳卒中発症率が19%高かった（同：1.19）。また、便秘薬を使用していない患者に比べ、1種類および2種類以上の便秘薬を使用している患者では、全死因死亡のリスクは上昇し、ハザード比はそれぞれ1.15、1.14であった。同様に、心臓血管病の発症リスクについては1.11および1.10、虚血性脳卒中の発症リスクでは1.19および1.21となった。

したがって、便秘と便秘薬の使用がそれぞれ独立して、全死因死亡、心臓血管病の発症、虚血性脳卒中の発症のリスクと関連することが示された。

出典：Atherosclerosis. 2018 Dec 23; 281: 114-120.